

オウム対策住民協議会ニュース

『オウム真理教問題を風化させない』

—オウム対策住民協議会 第18回学習会要旨—

5月16日(土)にオウム真理教(現アレフ)対策住民協議会が主催した、第18回抗議デモには、約250名が参加した。その後、元内閣危機管理監で、地下鉄サリン事件当時は、神奈川県警察本部長を歴任した杉田和博氏が、『オウム真理教問題を風化させない』と題した、以下の講演をおこなった。

1. 麻原の求めていたもの

麻原は、1980年代のカルトブームを背景に、1990年の終わりにはハルマゲドン(最終戦争)が起り、荒廃した土地だけが残ると予言し、自らを筆頭としたオウム真理教の千年王国を起す、と信者に説教していた。実際、武器を作ったのも、兵士3万人を育てたのもこの王国建国のためで、このために数々の事件を起こしたといえる。

2. オウムのツメアトは?

オウム真理教は、その前身である「オウム神仙の会」が15名程度で発足した1984年から、1995年の解散までの十年余りの間に、日本犯罪史上最強最大のテロ集団

と称される団体となったが、それは、オウムが起こした事件の結果である。死者28名、重軽傷者6,000名、逮捕信者数484名、内死刑判決13名、内無期懲役5名といったツメアトにも窺われる。

さらには、獲得信者数1万5千人、獲得資金100億円、生成武器は、自動小銃から生物化学兵器に至っていた事実にも、その強力が目撃される。

3. オウムの所業を振り返る

この1984年から1995年までの十年余りの間に、オウムは多くの事件を起こしたが、1988年8月の宗教法人認可を境に、社会との関係が多くなってゆく。つまり、前半はオウム内部に留まって

烏山地域オウム真理教(現アレフ)対策住民協議会



抗議文を読み上げる

いた時期、後半は、出家信者の家族との軋轢やマスコミの追及を避けられず、社会と戦った時期と言える。前半では脱会しようとした信者を殺害した「田口修二リンチ殺害事件」などが特徴的で、後半には、「松本サリン事件」「亀戸異臭事件」「飯谷さん拉致監禁致死事件」を経て、地下鉄サリン事件が起きる。この地下鉄サリン事件は、世界初の化学兵器使用テロという特徴のほか、警視庁に一斉搜索を敢行させ、解散という終結を迎える引き金になったこと、オウムによる全ての事件を白日のもとにさらけ出したことでも特筆されるべき事件であった。

4. 麻原に好き放題を許したのは何故か?

振り返ると麻原に好き放題を許したのは、「オウムの巧妙さ」と「信教の自由という枷」であったと思う。オウムは、出家制度などの巧妙な仕組みで、信者を外



講演する杉田和博氏

界から遮断したが、これは同時に、社会にとってもオウムがベールの奥の存在となり、オウム内部で起こっていることが隠される結果となった。さらに、戦前の宗教弾圧への反省から憲法にも謳われた「信教の自由」が、疑わしきものの中への調査を押し止めてしまい、二重の手枷足枷になっていたように思う。



オウム施設への抗議デモ

5. オウムに新たな事件を起させないために?

地下鉄サリン事件が起きた時、世界は、市民生活の中で、化学兵器を使った初めての事件として驚き、これ以降、欧米は、対テロの準備をしてきた。昨年10月の「対国際テロ会議」においても、オウムをどのように制圧し、現状はどうなっているのか、と各国の関心はオウムに集中した。

オウムやアルカイダといったテロでは、犯行の事前封じこみが世界的な傾向で、無線や電話の盗聴、行動の監視などの方法で情報を事前入手している。しか

し、これは、人権上でも問題であり、監視は密告社会にもなりかねず、特に、日本には馴染まない。「自由と安全」は、相反するもののように、妙案なしの状態である。しかし、こういった状態、時期だからこそ、一人一人の住民やマスコミが凶悪な犯罪を忘れず、時々思い出すことが大事で、烏山の活動方式が今まさに求められていると痛感する。烏山住民の弛まぬ活動に心から敬意を表したい。

投稿 「風化させないことが、一番大事!!」

学習会で講演を聞いて
杉田氏の講演を、ああそうだった、そうなんだよ、全くひどい団体だったんだ、何が宗教団体なのか、などと、自分なりに、オウムの起こした事件を、思い返しながら聞きました。今回の講演だけでなく、毎回の学習会は、ひよっとしたら、オウム事件の思い返しにすぎないのかもしれない。ですが、それが杉田氏の言う「風化させない」ことなのではないでしょうか。そして風化させないことこそが、オウムの引き起こしたような、テロという危険を未然に防ぎ、安心して生活できる未来を築く、一番の対策に違いありません。住民協議会の活動も長くなつて、試行錯誤が続くようになつてきましたが、それでも継続すること、すなわち風化させないことが一番大事なのだ、改めて思いました。

第18回抗議デモ・学習会のアンケート報告

【実施日】 2009年5月16日(土)

【回収枚数】 50枚

【開催情報の入手方法】 協議会ニュース10、チラシ7、
広報車2、町会自治会回覧32、その他6

【学習会及び協議会活動への感想】

- ・国中で大きな問題になった事件の当事者がまだ存在することは、決して風化させてはならないことなので、必要だと思えます。
- ・デモ行進の際、列の後ろの方には「オウム反対」の旗を持つ人は多かったが、前の方には、1人もいなかった。
- ・住んでいる方が減ったとはいえ、住まいを変えているだけのことだと思います。悪は根絶するまで闘っていかなければと思っています。1日も早く安心して住める街にしていきたいと思います。
- ・これからは、過去のことでなく今・将来のテーマにしてほしい。過去のおさらいに終始していた。

- ・学習会や協議会活動により、安全な街になることを祈念しています。
- ・オウム事件の振り返りができた。今後の活動へのモチベーションアップになった。
- ・系統的なお話でとても理解しやすかった。1つ1つの事件のつながりがわかって良かった。
- ・若者の参加を期待。
- ・経過も手のうちも知っている現在としては、経過評論されても退屈なだけ。もう少しダイレクトに行動指針などかを期待したかった。
- ・これまでの経過をあらためてお聞きし、危機感を感じました。
- ・オウムが今もって非常に危険な団体であることを認識させられた。
- ・まだ終わっていないオウム問題を風化させないためには、継続的な戦いが必要であるということがよく分かった。

埼玉県吉川市オウム真理教施設へ取材

今回は日程の都合で、一人での取材となった。永福から乗った首都高速も、15分程で渋滞解消。その後順調に走り、八潮南インターで降り10時45分には最初の目的地、吉川市役所に到着。庶務課の担当職員に話を聞くことができた。協議会ニュースのバックナンバーを手渡し、烏山の活動を紹介。吉川施設の現状を聞いてみた。住宅自治会の方から、2～3年前にオウムの信者が挨拶にきたとの情報で、信者の居住が確認できた。当初、市役所と警察が警備していたが、信者とのトラブルの報告もないので、現在はしていませんとの答え。オウム施設の場所を聞き、親切な対応に感謝し目的地に向かった。

そこは、これまで取材した施設とは異質の場所だった。オウム真理教施設の認識は、人との距離を置く雰囲気であったが、今回は違っていた。20軒ほどの2階建ての家が、2列に並んだ長屋になっていた。まるでオウムの方から、住民に溶け込もうとの、強い気配さえ感じられた。3人の住民に話を聞くことができた。オウムが来たのは5年ぐらい前で(市役所の話とは違

った)住人は何回も変わったようだ。「最初はオウムと言うことで、薄気味悪かったが、今はなんともないよ」「自治会の会合にも出てくるし、向こうも色々考えているんじゃない」住民の多くは好意的に受け止めているようだ。「脱会するという信者がいて、すこし騒がしいことがあった」と興味深く話す「うちの子と同級の中学生がいる信者もいて、学校ではいじめられていたようだよ」あっけらかんと話す母親に、私も拍子抜けしてしまった。オウム真理教の真の姿はなどと、少し説教めいた話をした。取材への感謝をし、複雑な気持ちで帰路についた。



住民協議会活動報告

5月 7日(木) 事務局会議
5月 9日(土) 学習会宣伝ビラ配り
5月15日(金) 学習会広報車活動
5月16日(土) 学習会広報車活動
5月16日(土) 学習会宣伝ビラ配り

5月16日(土) 第18回抗議デモ・学習会
5月20日(水) 実行委員会
5月25日(月) 「協議会ニュース86号」初校正
6月 1日(月) 「協議会ニュース86号」再校正
6月 8日(月) 「協議会ニュース86号」発行

協議会ホームページアドレス <http://www.kyogikai.jp>

この協議会ニュースは、皆様の募金により発行されています。